

パールフット彫刻からガンダーラ仏へ

(大乘仏教の基盤の考察)

高 橋 堯 昭

私は二度にわたってインドとパキスタン及びアフガニスタンの仏教遺跡の調査をして来た。

第一回のパールフット(現地になくカルカッタ博物館内に復元)や、サンチーの偉大な遺跡をみて、ジャータカやヤクシニー像のその素晴らしさに打たれた。更に二回目は所謂ガンダーラ仏やバーミヤンの大石仏にかつての仏教の隆盛を眺めて来た。

然うして私はこの両者に、大きな立場の移行を認めるのである。即ちパールフット、サンチーでは仏の像は未だない。然しガンダーラでは、ゼウスやアポロと見まちがう程のギリシヤ的な仏像がある。然もそこに彫られた物語が、前者は釈尊の本生話、即ち前世物語が多く、後者には仏伝図、即ち生れてからの物語が多い。然して後者のジャータカでは燃灯仏の像等、然もこの燃灯仏話では釈尊以外の仏、阿弥陀、阿闍(アハク)、弥勒(ミツク)、弥勒等の物語りが出て来る。私にはこゝに於てパールフットからガンダーラへの移行に、大乘仏教への推移が読みとられるのである。

パールフットはインドの丁度中央部にあり西方海岸とマガダ国を結ぶ重要な道路沿い、アラハバートから一二〇哩

もの所にあったストウバーで、大体西紀前三世紀の後半から前一世紀までの作である。

こゝは当時余り有名な仏教遺跡でも、重要な政治都市でもなかった。為に玄奘や法顕もこの地について何らの記録を残していない程である。だからこそ逆に、回教の破壊からまぬがれて現代に数少ない貴重な文化財を、こゝに残しているのではあるまいか。

一八七三年英国のカニングム氏が、この地で一庵塔を発見した。その際仏塔は完全に破壊されており、単なる土の堆積にすぎなかった。が幸いにも欄楯(玉垣)の一部と、東の塔門柱が公にされた。又、一八七四年に開始された発掘で、多数の遺跡が発見され、現在カルカッタ博物館の入口すぐ右手の室に復元され人々の目をおどろかしている。

カニングム氏の測定によると、このストウバーは直経が約二十三米あったらしく、これを巡る高さ二米七十の欄楯は、東西南北の四門の塔によって四分され、完全時の直経は二十七米、全長八十五米に及んでいたらしい。四基の塔門は、現在東門のみ不完全ながら残されている。大体の形は、サンチーに似ているが製作年代が古いだけに規模、形式ともにやゝ古風で劣っているとされている。

門柱は八角形を四本合せたものゝ上に共通の頂盤をのせ、これに二頭の獅子の蹲座した像がのっている。然もそれゝの柱は、アソカ王柱に真似て鐘をふせたような形の蓮弁の柱頭をもっている。又、土中から発見された門柱には牡牛の像があるから、或は、アソカ王柱にならって四聖獣をのせていたのかもしれない。門柱には三本の横梁を鳥居のようにのせ最上段の中央には、様式化した忍冬模様様の支えによって法輪が安置され、高さ六米八十五ある。(これは後述のサンチーの塔門の先例をなすといわれている。)

この門柱の左柱の内側中央に「ジュンガ王の治世……塔門を建て石工これを起せり」とある為、歴史年代記のない

インドでは特に重要な文化財である。

門から門への欄楯は、柱と柱の間に三本の横木のような貫石でつなぎ、上に長い笠石をのせている。欄柱は八十本中四十九本、笠石四十本中十五本が発見されているが、この柱の上下には半円、中央には円形の浮彫りをほどこし、横木ともいうべき貫石にも円形の浮彫りがあり、門柱の側の欄楯の柱のみ全面にわたる彫刻及び、濃艶な魅惑的なヤクシニー像が彫られている。又笠石も美しい浮彫りのフリーズをなしている。

浮彫りの内容は蓮華を主とする多数の裝飾文様の外、釈尊の在世の物語りや、前世の物語り即ち仏伝や、本生図が描かれている。然も多くは題銘があつて内容の理解を深め助け、古代期仏教美術の研究上極めて貴重な鍵となつてゐる。私は更に東西文化の交流史的立場からこれを特に重視したい。特にこれといつて歴史の記録のない印度に於てはなお更である。

パールフットと丁度同じようなストウーパがポパール州のビルサにある。これが有名なサンチーである。幸いにもこゝはほとんど完全な形に復元され、印度文化最大の遺跡として存在している。

第一塔、第二塔、第三塔はパールフットと大体同じ頃の前二世紀に、特に第一塔はマウリヤ時代に建てられたものと思われる原塔を中核として、今日見られるような大きなものに作り変えられたと思われる。

第一塔の欄楯は、前一世紀から後一世紀のアンドラ朝。第三塔はこれより更におくれる。第二塔の欄楯は一番古くパールフットと同じくジュンガ朝のものである。

この一番古い第二塔の欄楯の柱には、パールフットと同じく多くの彫刻がある。「摩耶夫人の二象による灌水」或は「足跡善知童子本生図」等、多くの図が彫られているが、笠石や貫石には全くほどこされていない。

更にこの第二塔以外では、パールフットののような欄楯の彫刻はなく、唯鳥居のような塔の四方の門柱及び横石に全面に仏伝図や本生図が彫られているのみである。こゝにパールフットとサンチーの違いがある。

又は、パールフットと殆ど同じか少しあとで出来た、仏陀成道の聖地ガヤの大塔の廻りの欄楯には、パールフットと同じく、柱、貫石、笠石に彫刻がある。これはやゝもすれば大塔や菩提樹にかくれて、参詣者の見のがし易いものであるが、現在の大塔の出来る前の素朴なストウーバをしのばせるに重要な柵である。この中にも多くの模様や「祇園購入布施図」等の仏伝図や「足跡善童子本生」「亀本生」の二つのジャータカがみられる。私がこのパールフット、サンチー、或は、ガヤに於て興味をひかれるのは、これらの彫刻の中で蓮華等の純印度的なものが模様として使われている中で、サンチー大塔西門第一梁、第二梁、第三梁背面右方、大塔北門横梁、頂上左方背面等その他に有翼の獅子、半獅子、半鷲、有翼の馬等がある。又、サンチー第三塔東門及びガヤの円い文様中に羽根の生えた馬が見られ、又インド的でない圖案化された紋様、或は忍冬模様、即ちつる草の模様がみられる。特に有翼の獅子や馬は、ヘルセポリスの有翼獣像につながり、更にはアツシリアにまでさかのぼるであろう。或は別系統としてギリシヤ、ヘカサスの神像につながるであろう。

更にサンチー第三塔南門には、アシヨカ王柱を真似た四頭背合せの獅子の像があり、更には西門の左柱の柱頭が四人のヤクシャーが、又東門右柱頭のは四頭の象が横木を支えている。これは有名なアソカピラー（柱）の背合せの四頭獅子の代りに、インド的な象やヤクシヤ像を以てこれに替えているのである。これはアソカ王柱自体が後述するやうに西方的なものであるから、こゝに西方的なものとの印度的なものとの混合を認めることが出来る。（然しあくまでも印度的なもので支配してはいるが。）

又更にパールフットの欄楯の中で、東門の横梁の中間にある小柱に印度的でない容貌の像があり、又絵を解説してある銘は大體ブラフミー文字と云って当時印度で使われた文字が普通であるのに、この中で、五ヶのカロシテイ文字がある。これは西方印度で使われた文字であることから、そちらの工人が加つたことが分る。



(写真A)

更にパールフットの欄楯の中で、東門の横梁の中間にある小柱に印度的でない容貌の像があり、又絵を解説してある銘は大體ブラフミー文字と云って当時印度で使われた文字が普通であるのに、この中で、五ヶのカロシテイ文字がある。これは西方印度で使われた文字であることから、そちらの工人が加つたことが分る。

更にパールフットの「七色の鹿王物語」のすぐ左上にあるクジャクの模様は、左右相対的で写実的でありこれはインド的と異なる。印度的在り方はこのクジャクの近くのヤクシニーで示すように左右が不均衡で、特に片方の足に重量をおき肉体、特に腰の線に媚態的な感情をささうような像が多い。更に写真A「鹿王物語」(「美しい鹿に助けられた旅人が、約束を破って王様に鹿の居所を知らせ、うたれた鹿が王にわけを話す。王は忘恩の旅人を処刑しようとするが又鹿は殺生はよくないと王をさとす、この鹿こそ釈尊の前生という有名な物語」)のジャータカで見られるように、絵の下方では河の中で鹿の背に人が助けられている。横の左右では、右に弓に矢をつがえた狩人、左が逃げる鹿たち、中央に大きな鹿(釈尊の前生)、それを合掌する三人の像、その舞台たる森を表わす三本の本等々、物語は雑然と書かれている。これは印度と西

方の絵の違いを単的に表わしている。即ち印度では個々は認められず、すべては永遠の流転の相の中に於て求められる。静止的でなく活動的にとらえられる。故に西方の如く、個を独立にとらえ又その主題と背景が遮断されることはない。空いている所にすべて挿入されてゐるのである。このように印度的特徴の絵と、スッキリした図案的絵とが混在している。これはマウリヤ王朝時代に、別個に活動していた外来派（外来人及び西方印度人の宮廷直属の芸術家）と、インド在来の民間芸術家との両派が協力したと考えられる。従つて西方文化のインド化、ひいてはその混入綜合がこゝに読みとられるのである。



然らば立ち返つて西方との関係は、当時否それまでどのような関係をもっていたのであろうか。

まず第一の交流はアレキサンダー大王の印度侵入である。（厳密にはそれ以前、間接にギリシャとの交流があったことがうかがわれるが）大王の死後、その国土は三分され、西北印度はセレウコス朝の下に入り、幾多のギリシャ人の小国が形造られる。

マウリヤ王朝になると、その首都パータリプトラがヘルシャのメルセボリスのアバダナの列柱の間を模したといわれる。それを示す列柱が最近発掘されている。又ギリシャの使節メガステネスは、「パータリプトラはスーサ エクバダの宮殿より立派だ」と記している。又エジプトのプトレマイオス王朝の使者フィラデルフオスは次の如く伝えている。即ちピンドサーラ王が、いちじくとブドーの贈与を願ひ更に哲学者を、大金をもつて報ゆる故送つて貰ひ度いと申し出された。

これらは印度諸王が、如何に西方文化に真剣な熱意を示したかを物語るものである。

又、アソカ王の王柱は、アッシロ・ギリシャ的であると言われている。特に現在印度の象徴となっている鹿野園出土の獅子柱頭についてこれを見るに、背を合せた四つの獅子の丸彫りの巧みなる写実と力強い表現、その下の象、牡牛、馬、獅子の四聖獣と法輪を配せる頂盤彫り等の勝れた技法は、正に西方的であり、その銘等が印度本来のブラーミー文字にある外アッシリアやメソポタミヤで使用した北セミテ、ツク系のアラマイク文字に近いペルシャ語系のカロシテ、文字による所からなお更である。然うしてアソカ王の岩をほって詔勅を書いた仕方、所謂摩崖詔勅自体がペルシャでよく行われていたことである。更にその摩崖詔勅に同時代の西方諸国の王の名が多く出ているから西方との交渉の程が知られよう。(摩崖詔勅No 13)

このように西方文化が東漸して来る間に仏教が又西進して行く。これを示すものとしてアソカ王の摩崖詔勅に「ガンダーラに大法官が、ガンダーラやカシュミールにマジヤーアンテイカ(末闍提長老)が派遣された」ことが示され、又、オリッサ州のダウリで発見された他の詔勅には「我又為に如法に五年毎に柔和忍辱、生を愛する人を集めて以てこれを講じ、我々が教うる所によりて行ぜしめん。ウジーニの副王も亦、三年毎に斯の集合を催すことを忘れざるべし。タキシラの副王も亦然り。」とある。

このような仏教の西進と西方文化の東漸を媒介するものが、バクトリヤやバルティヤ等のギリシャ人の王国である。仏教への帰依で有名なギリシャ人の王、メナンドレスとナガセーナ長老との対話は「ミリンダ王問経」となり、彼の貨幣に「随法者」「正法大王」の銘記及び法輪の形を打ち出していることからその両者の綜合が見られよう。

然も時代は更に下り、バクトリヤとバルティアに代ったのが大月氏国である。然もこの国で注意すべきことは、ウイエマ・カドフィセス王の金貨とローマの金貨との割合が、一对二の同じ単位で作られていることである。これは明

かにローマとの通商を前提しているのである。

更にその子カニシカ王が西紀後一二八年に即位し、カシミールからアフガニスタン及び、現在のソ連領トルキスタンまで東はガンジス流域のマガダ国をまで領有し、こゝに印度人、ギリシヤ人、ベルシヤ等あらゆる国を合せた普遍的世界が現出する。然もこのような広い世界での仏教の保護は、それが小乗であろうとも刺戟となってナガール・ジュナ(竜樹)、アシュバグホーシヤ(馬鳴)の大乗運動をひきおこすのは当然のことであろう。



そもく仏教自体、その成立はより普遍的な立場を求めて成立したものであった。かつてガンジス中原の村落が、その中に各種のカーストをもち、ひいて分化した職業カーストをもって、それ自体閉された社会を形成していた。これがバラモン教、ヒンズー教の社会的基盤となつている。仏教は当時の小さな部族国家がマガダの統一国家を生むこの政治的統一の傾向、又商業経済が民族、種族を超えて「曠野險難処」を行く、より広い社会の現成に対応しその自己自覚、即ち普遍的理念の自己自覚として釈尊の出生をみたことは前に詳述した(日本仏教学界(年報三十二号)(棲神四十)。恰も商業的理念、特に貨幣経済がすべてを貨幣価値に還元する。

即ち貨幣価値の前ではその身分や地位は問題でないように、すべては法の前に於て平等の立場をとる。そこには否定さるべきものとして閉された農村社会が前提されている。これが仏教の成立の基盤である。故に仏教が生きるにはより広い基盤を持つところの方が、よりその生存発達に適していることは論をまたない。私は仏教の成立するガンヂスの中原のインドと大乗仏教の成立発達した西北印度とはその基盤が全然異ると考えるから、この面から思想の進展があったと考える。

広々と稲田の続くガンジス流域と、乾燥したたか／＼麦しか産しない、ラクダの旅する西北印度では全くその環境を異にする。

俗に言う「ガンガの水は雨水を集め、シンドの河は雪山の水を集めて砂漠を流れる、」と。

これがカイバール峠を越えてアフガニスタンに入ると乾燥は一層ひどくなる。天下最美とうたわれたナガラハラの仏影窟のあったジェラバードやハッダ、カブール、ペグラムは殆ど砂漠の中である。史上最高とうたわれた五十五米の大仏のあるバーミヤンへの道など草一本ないはげ山、その麓に散在するオアシス、昔の旅人はこのオアシスからオアシスに旅したのであろう。このようなオアシスでは到底自給の生活は出来ない。ラクダの隊商が有無を通じ、これが有史以前から支那、ギリシャ、印度の文化を媒介する。

恰もエーゲ海の島々がポリスとして独立していながら然もつながり、普遍的思想即ちイデアの觀念が成立したのと規を一にする。

この砂漠のオアシスがはなればなれでありながらつながり、世界性普遍性を持っていたことは、ガンジスの農村が閉された村落や社会を持っていたのと好対象であらう。

このような普遍的な世界なるが故に、あの死の砂漠を法顯、玄奘等の支那僧が、又印度の訳経僧が支那へ渡って行くことも可能であったのである。若しもアフリカの如く閉された部族を通じて行ったら果して生命の保証が得られたであらうか。又

このような社会だからこそ仏教が指導原理として住み着き発展して行ったのであろう。然も仏教のみならずギリシヤ文化が、支那文化が、或はベルシヤ文化が共に共存する。そこには眞の普遍的な世界的社会が現成し、然もそれら

が混然と融合し、仏教もギリシヤ、ヘルシヤをとり入れて大乘化する、そこには最早ヒンズー教やバラモン教がこゝに住着かなかつたことは勿論である。



然らばこのような環境に於てどのような思想が出来たのであろうか。その特徴は一体何であらうか、私は一つの方法としてパールフット彫刻からガンダーラ仏への移行にこれを考えてゆき度い。

即ちこれは結論的に言つて、印度古来の無仏の立場から造像の立場への移行であり、大きな立場の飛躍進展である。

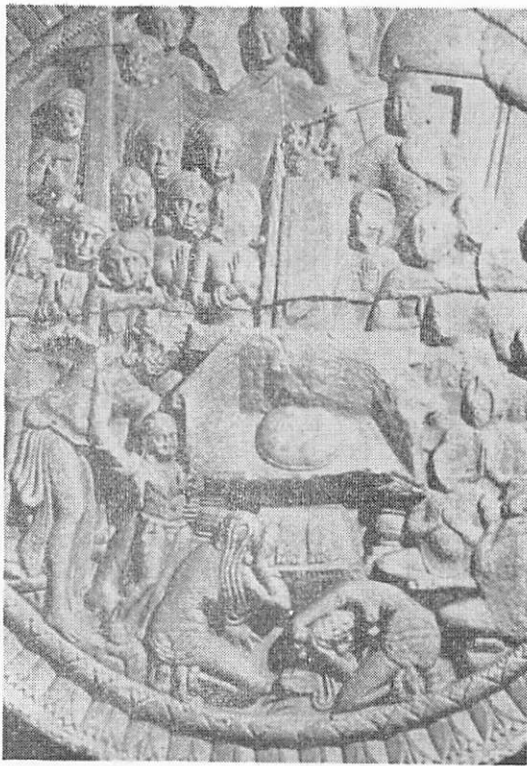
然らば仏像は一体何時頃から出来たのであろうか。経典には、増一阿含(卷二十八聽法品)、根本説一切有部毘奈耶雜事(卷十七、卷三十八)雜阿含(卷十)十誦律(卷四十八)の諸経典に造像のことが記されてある。今、増一阿含経によつてみるに、「衆王が法を聴かず修業を怠つたので釈尊は、三十三天にのほり母摩耶夫人の爲に法を説いた。地上では釈尊の姿がないのでコーサンピ城のウドヤーナ王やシュラバステイ城のハシノク王は、釈尊を慕つて病氣になつた。そこで夫々五尺の像を刻んだ」とあるが、仏教の経典の常として一番古い阿含部でさえ各部派の立場で結集増補されているから、この経典も仏像の出来た頃に編纂されたのであつてあてにならない。

だから私には、現実に残っている彫刻や貨幣或は支那への訳経史の立場からこれを見るのが一番安全な道であらうと思われる。それ故私はこのパールフットやサンチーの欄楯や門柱の彫刻を以て考えたい。然しこれも非常に数多くの彫刻があるから、極く代表的なものを以て説明したい。

パールフット、ガヤ、サンチーの欄楯の作られた年代、即ち西紀前三世紀後半から一世紀までのこの頃に仏像が果してあつたであらうか。現在のところ発見せられていない。

アソカ王柱に見られるように、現在でも真似出来ぬ如き正確な動物の摸写が行われていたが、人間の像は出来なかつたかと言ふとそうではない。かの濃艶な等身大のヤクシニー像があり、特にサニチーの第一塔東門のヤクシニーは余りにも有名である。更にカルカッタ博物館にあるパトナ出土のヤクシヤ像や、ディダルガンジュ出土のチュナール産砂岩のヤクシニー像の芸術的美しさは旅人の目を樂しませる。

にもかゝらず、仏陀像だけは存在しない即ち、パールフットの各彫刻で見られる如く「衆象聖樹礼拝」「毘舍浮



(写真B) アマパラバティー出土(無仏像の立場)

仏の菩提樹」「加葉仏の菩提樹」等、正面の中央が大きな樹となり、人々はそれを礼拝している絵、これは菩提樹によって仏を表わしているからである。

或は「法輪礼拝」「波斯匿王礼拝」の如く、人々が中央の大きな法輪を礼拝している。又「加羅林大会」の如く玉座と法輪のついた仏足跡石を拝し、或は「塔礼拝」の如く頂上に法輪のある大きなストウーパの両側に人が合掌している。

例えば写真(B)の如く法輪のついた椅子ヤクツションだけの玉座、或は法輪のつ

いた仏足跡を人々は合掌している図には私には敢て仏陀を表さないと意識が読みとれるのである。

即ち、人間のいやしい姿を以て至上の仏陀は表現出来ないという立場である。

原始、小乗仏教では、釈尊の存在が余りにも大きい為に人間はたかく阿羅漢にしか至れない。釈尊と我々人間との間には隔然たる区分がある。従ってこの立場があるからこそ、ヤクシニーのような立派な像を作り出す能力がありながら、敢て作り出さなかったと私は考える。更にこの立場を尊重するが故に、サルナート(鹿野園)出土の西紀后百三拾年頃にバラ比丘が奉獻したという菩薩像が、実は如来像でありながら敢てその銘に菩薩と断っているのである。即ちその銘文には

カニシカ大王の三年第三月二十有二日比丘ブシュブデーの同侶三藏の法師比丘パーラ父母師尊同名徒弟並びに三藏に熟達せる比丘ニカストラーババナスパーラ及びフラパラナ乃至四衆と共にバラナシの薄伽梵の嘗て経行し給へるところに「菩薩像」一、並に天蓋及び柱を送り供養し奉る。願わくは之によって一切の……同じく安穩幸福を得んことを……。

第二銘(像の背面)に

カニシカ王の三年冬第三月二十有二日三藏法師パーラ「菩薩像」並びに天蓋及び柱を造り……

第三銘(台座の前面)

…菩薩像一軀を作り供養し奉る

と菩薩であると三回もことわっている。

更に同様なことは写真(C)の後一三〇年頃作られたというマトウーラ市内のカトウーラ出土の坐像にも当てはま



すだけである。

然るに菩薩では頭に必ず宝冠を頂き、胸には珠をつないだ装飾をかけ、手には手劔あり足には足劔、その衣装も仏や声聞像と異って、天衣の左右に飛揚するものもある。これらは結局仏教の僧団生活には、一切の金銭珠寶乃至莊嚴具を蓄うことを禁ぜられているのに菩薩像は在家の人特に貴人の相を、そして人間の欲望をきれいな形で表現したにちががなく又、未だ仏の出家せざる以前の在俗の形を顕したものと云われていることから考えても、この二つの菩

る。これには「父母と共に菩薩像一軀を作りその寺に供養す」とある如く、あえても菩薩とことわっている。

この仏像は左右に宝冠を頂ける侍者あり、上に天人が飛び、台座に獅子を配置し、頭上に肉髻あり形は螺の如く手は施無畏の印を結んでいる。これは即ちはっきりとした仏像である。

大体仏像は光背や台座には諸種の微妙なる莊嚴を施してあるが、仏自体には何らの莊嚴は存しない。即ち無所有の理想を示し手に一定の符号的持物を持ち、或は印を示

薩像は明かに仏像である。

仏像でありながら然も敢てこれを菩薩という、私はこれ無仏時代、敢て仏を表現しない立場から仏を表現する立場へのプロセスであると考ええる。

然もこの菩薩像の作られたと同じ頃、実はカニシカ王の貨幣の上に仏陀の立像を顕わし Boddo、即ち仏とはっきり記している。又後述のカニシカ舍利器（写真E参証）の蓋の上に釈尊像が彫られているから、一方にあえて「菩薩像」とことわる立場と Boddo と断言する立場との混合」の時機であり、この時期が無仏時代から有仏への転換期、過渡期であったといえよう。

然うして一度、仏像が出来るや否や堰を切った水の如く続々とギリシャ風の姿を持った即ちゼウスと見まがうが如き仏像が西北印度、所謂ガンダーラで作り出されるに至るのである。これ即ち世に言うガンダーラ仏である。

然うしてそれが大体ガンダーラでは、仏の造像が五世紀位まで全盛をつゞける。やがて白フン等の侵入迫害によって遂に衰滅に至る。これと平行して、アフガニスタンのハツタ辺りでは少しおくれて、四、五世紀にストウック（泥と石甁の様なもの）の特徴を持つ仏像の造像が全盛となる。これらが時代を経る毎にギリシャ風貌が印度化してゆく。最後にグプタ仏の純印度的仏像に連結する。

又、絵画もあつたであろうが、その性格上無に帰したと考えられよう。大唐西域記に「那渴（ナガラハラ）の仏影も…云々」と言っているのはこの間の消息を物語るものであろう。

この仏像の出現と、竜樹、馬鳴の大乗仏教学者の出現と大体時機的に一致するが故に、明らかにこゝに小乗から大乘への飛躍が示されるのである。

これに対する刺戟は明らかにギリシャ文明であることは論をまたない。然し私は見落してはならぬことは、仏教自

体の問題即ち、小乗の有部等の考えに、即ち仏教自体の中に大乘化へのエレメントがあるということである。

つまり有部は非常に現実的な性格を持ち「無尽」の思想をまで展開し、釈尊の無所有の立場から現世的な我々の欲望を体系化するに至るまでに内在化、現世化させている。このような立場、端的に小乗的な菩薩を生み更に大乘へとひきつぐのである。之を刺戟促進したのがギリシャ文明といえよう。

即ちギリシャの神は、最も完全な人間の姿である。智・情・意、の調和的発達がギリシャ人の理想である。ギリシャ人が好んで人間の美しい彫刻をもって神を表現する例がこれである。この考え方が仏教に大きな影響を与えるのは論をまたない。超越的な仏の立場から我々の完全性即仏という立場が、この仏像形成へむかわせ、ひいては大乘仏教の思想的飛躍にも影響を及ぼすのである。

さて仏像を作るのには、即ち人間の姿を以て仏を表現するのにはそこに何かしらその特性を考えねばならない。これが三十二相、八十種業という特性である。然も特筆すべきは、「この三十二相の考え方は大乘仏教が起ってから出現したのではなく、有部の中に最早用意されていた」と友松円諦氏は説かれていることである。

然しその三十二相の完全なる表現は到底不可能なるが故に未だ仏像に表現されなかったのであって、この考え方が印度で用意されていたればこそ、易々とギリシャの考え方と、ギリシャ的彫刻の刺戟とによって仏像が作り出されたのであると考えられる。



こゝで興味ある問題は、パールフットの彫刻の内容である。これは非常に研究に便利なのは前にも述べた如く一つ一つの彫刻が殆ど場面の側面や下や横等に銘が入っていることである。いはゞ解説つきであるから、意味の解らない

一部分壞れた彫刻でも判断出来るから、種々の經典に出てゐる内容が当時あったものか又、後世の挿入かどうかの研究も非常に便利である。今こゝにその一、二の例をとつて内容即ちジャータカを問題としたい。

然らばこのジャータカ自体が何時頃成立したのであるか。一番古い經典といわれるスッタニパータや、相應部の古い層にはそれらが見出されない。

そこにはたかゞそれが将来ジャータカに發展し得るであらうような寓話がそのまゝに残っている。然し一方、大體前三世紀後半から前二世紀、更に前一世紀前半に作られたといふこのパールフットに、このように多くのジャータカが出てゐることが研究の手がかりとなる。ジャータカは本生話といふのは仏の前世に於ける修業物語であり、釈尊が過去世に於て、人間、天人乃至動物として生々流転しつゝ、種々の福業を積み、六波羅蜜の聖業を實踐せられたことを述べるものである。これ等の本生話は何れも仏説として伝えられているが、元來そこに物語られている多くの説話は、古來のインド人一般の共有な、種々の伝説、説話、寓話の類で、後に菩薩の考えが出るとその菩薩の修業を説く為に、斯る物語りに於ける主役又は脇役乃至傍觀者を菩薩におき換へることによつて仏教化し、民衆に最も理解し易いように教化の面に便利ならしめたものである。

然うして仏伝との關係は、その仏伝の関心が段々成道以前にさかのほり、如何にして俗界に生をうけた悉多太子が、成道して救世の大導師となられたかの原因動機にポイントが移り、更にさかのほつて、斯かる大いなる果報を獲られる為には過去何百劫の長きにわたつて、菩薩として種々の修業を重ねられたのに相違ないと信じて本生話を生むに至る。即ちこゝに至れば、本生話と仏伝とは連続する一連の物語りとなり、「錠光仏（燃灯仏）の授記にはじまつて種々の修業の過程を経過して兜率天上に生れ、そこより象形をとつて摩耶夫人の胎内に入り、かくしてルンビ園

に太子として生誕し、長じて出家、六年の苦行の後、ブダガヤの菩提樹下に降魔成道して、鹿野園に法輪を転じ多くの大弟子を得られた。

こゝでは仏伝の前世の部分を、ジャータカが受持つことになる。

大體の特徴として、パールフットの頃には素朴なジャータカが多く、ガンダーラになると燃灯仏や捨身供養のジャータカになって、その物語の種類は少くなるが深さが出る。

これはつまり、パールフットの如き話題が段々整理され洗練化されて来たことによる。

故にジャータカより、むしろ仏伝図に代るといえよう。即ち燃灯仏の話によって釈尊の前身菩薩の善行により仏になる授記記別をうける。為に燃灯仏は最後のジャータカと言えよう。これ故に、今度出て来るのは仏伝、即ち釈尊の一生の話、特に四門出遊の、生、老、病、死、涅槃の四相を表現する方法、或はこれが展開して八相の彫刻が随所に
出るのである。

例えばラホール博物館の有名なシクリ出土のストウーパの彫刻は、十三枚あるうちジャータカは燃灯仏（錠光仏）の説法一つだけで、あとは全部仏伝図である。

これはつまり、釈尊をシンボルだけで表現する立場より、仏像によって釈尊や仏を表現出来るようになったので、
仏伝図が多くなるのは当然のことであろう。

更にこゝで問題となるのは、パールフットやサンチーでも、過去七仏の思想が出てくることである。つまり、七つのストウーパや菩提樹でこれを表現している。これが段々純化洗練されると、阿弥陀、阿閼の、三世十方諸仏の考え方に発展すると考える。従ってこのパールフット、サンチーの過去七仏の思想と、ガンダーラの燃灯仏の本生話との

間には、立場の飛躍があることを確信する。

これを示すものとしてジャータカではないが仏伝のアーラ龍王（伊波羅龍王）礼拝の彫刻を問題としよう。

この彫刻は、中央に、龍王がコブラの様な形をした五つの頭を持つツナガー（竜）の頭の上に竜女を立たしめて謁となえしめている。その龍女の右手に、衣服を整え偏袒右肩して菩提樹（仏）の在る方を指示している女がある。これは那羅陀というパラモン女で、鹿野園の仏、即ち菩提樹の方を指しているのである。そして下方に龍王が眷属を卒いて菩提樹（仏陀を表す）に礼拝している図である。

これと同じ物語りの彫刻が、ガンダーラ彫刻にあり、私はラホール博物館で見えた。ガンダーラの方は、竜王妃、仏前に座して婦命の相を示し、この上に二段の世界が示され、各々の世界は中心に仏が座し、大衆が合掌している。これは過現未の三仏を示し思想の深化、仏の寿命の久遠を示している。

（この絵は全部で七つ発見されている。現在、カルカッタ博物館三、ボンベイ一、ベルリン一、その他二）
然うして仏本行集によると、この物語りは、

「迦葉仏の時、王が伊羅鉢樹を伐採した。為に竜王にされてしまった。然し迦葉仏の説くところには、「未来世、釈迦牟尼仏に遇い、その妙法を聞くと竜身を脱する」と予言せられた。そこで毎日々々美しい竜女に謁をとなえさせながら待つこと何劫、釈尊が成道後、鹿野園においてになることを那羅陀というものにきいて釈尊の御前に礼拝する。そこで釈尊は、将来弥勒仏の出現の時、出家して梵行を修すれば諸苦を脱するであろう」といわれ授記された」とある。

この經典の思想は明らかに大乘の考え方であって、パールフット時代にあつたかどうかは疑しい。つまり、過、

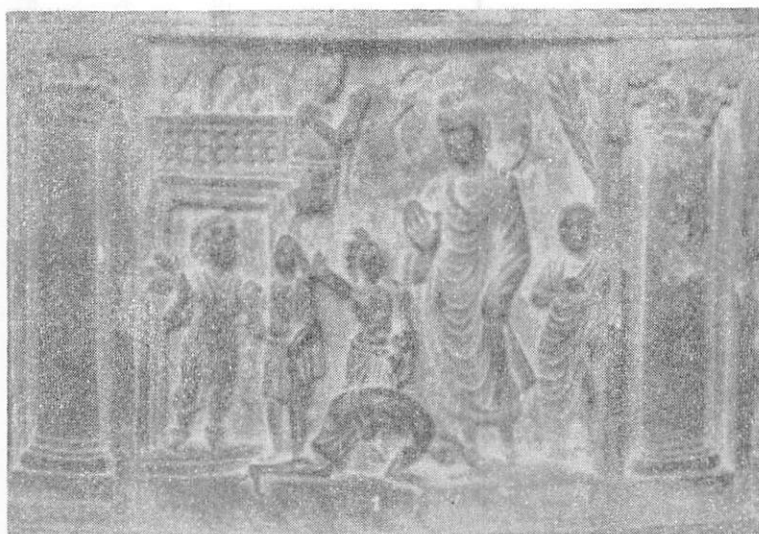
現、未の三仏の体系的な考え方、或は授記の思想がはっきりと出ているからである。故にこの經典自体が、ガンダーラ期以後のものではあるまいか、それに反して、パールフットの方は、菩提樹一つしかない素朴であるから。又それもくパールフットの仏伝やジャータカでは過去現在の物語しかないし又、他の話も非常に単純な譬喩的訓話ばかりであるから、このシーン丈が、過(去)現(在)未(来)と完成しているとは考えられない。当時は、唯、「悪行を修して童女になり仏に救いを求めて救われたというような話が、段々進化して授記の思想や、過現未の三仏の思想、即ち、大乘思想が、ガンダーラの彫刻として出たと思うのが自然であろう。

かくてジャータカは現存物から探すと、アショカ王の時代には現存しないから、アショカ王の直後のこのジュンガ朝辺りでいろくの寓話、譬喩話がこゝにとり入れられて来たと考えて良いのであろう。

釈尊の人格が段々と大きくなり超人化して、その奇跡や行蹟がとりあげられ、又更に印度人の業思想と結び着いて、前世の善行の結果によって仏位を得るといふように発達する。

善行をすれば仏になることが出来るから、これが発展して仏になる保証、即ち授記の考えや、授記を受けたもの即ち菩薩、即ち仏(ボデイ)たるべき有情(サツタ)という考えに進展、然もその善行も自己だけの、四諦八正道でなく、六度の他人の為に自らを犠牲にする、シビ王本性図(ラホール博物館)(シビ王が鳩を助ける為、自分の股の肉を切つて飢えた鷹に与えている凶絵の上の方に秤で肉を量っている)等の物語りの如く、大乘菩薩行思想との関連に於て出現することは今まで述べて来たところである。

然してこの菩薩思想の出るのは、前述の如く資料的に、大体カニシカ王の三年のカトーラ出土の釈迦菩薩像の銘や、パール比丘奉獻の菩薩像からであつて、それ以前には見当らない。例えば、パールフットの白象の摩耶夫人の胎



(写真D)

に入る所に「バガバット(世尊)胎に入る」と銘して、菩薩と
 いうていない。これを取扱った経典パリーの長部卷二では、
 「菩薩胎に入る」とあるから、この菩薩の考え方は、パールフ
 ット以後といえよう。これは支那訳経史の文献的研究から、西
 紀前一世紀を最上限とし、後一世紀を下限とする頃から菩薩思
 想が出たと干潟教授は発表しておられる。

セイロンのパリー伝にブツガーマニ・アバマ王の時代
 (前一世紀後半)にそれまで伝えられた仏典を文字にしたとい
 われているがその中、相応部、中部、雑史部では菩薩の言葉は
 使われている。

大体パールフッドからガンダーラへのプロセスを示す菩薩像
 の銘の如く、カニシカ王の時代頃が過渡期の下限を示している
 といってもあながち誤りではなからう。

このジャータカが徹底するとガンダーラでよく出て来る燃灯
 仏の考えが出てくるとは前にのべた。即ち錠光仏(燃灯仏写真
 D)の時に、釈迦牟尼菩薩儒童、王家の女が七枚の青蓮華を持
 っているのを見て五百の金銭を以て五茎の蓮を買い、彼女の寄

托する二枚と合せて仏に奉ったり（画面左端）又、地面が泥なのをみて皮衣を解いて地を覆う、それでも足らず為に髪をとき地に敷いて仏を通したそこで、「九十一劫の後、賢劫と名付く時、汝正に作仏して釈迦牟尼如来と号す」と授記を与えられた話に、今までの三世十方の仏として、阿彌陀仏や阿闍梨、弥勒等の仏が出現して、所謂、仏の寿命の久遠の考えが出て来る。こゝに至って大乘仏教は完成する。

私がラホールやその他でみた燃灯仏の彫刻や、西北印度の四大靈跡として玄奘達も詣でたという「已上割肉質鴿の所」、「以眼施人の所」、「以頭施人の所」、「投身餓虎の所」の思想は大乘化への道を端的に表わしている。



このような環境から仏像の製作が大体カニシカ王以来燎原の火の如く作られたギリシャ風の鼻の高い髭さえ生やした理智的な仏に対して、殆ど同時ぐらいにガンダーラの刺戟によって、インド中央マトウラで、（カニシカ王の冬都がマトウラ、春秋の都がガンダーラのペシャワルであったことが大きな刺戟となつてゐるであらう）仏像が作り出された。その仏の特徴は、肉体がすけて見える位衣がうすく、然も赤い砂岩に彫られたその印度的な肉感性は、ガンダーラの石自体の持つ青黒く冷たく、鉄の如く堅い理智的な感じと、好対象である。

この西洋の理性的なものを端的に示すものとしては、シクリから出土した、ラホール博物館にある苦行仏がある。あの、あくまでも骨と皮の仏、然も血管が一本一本みえる、解剖学的精密性にみられるような姿こそ、印度では考えられぬギリシャの理性の立場、対象化の立場である。

更にこの造像の隆盛さは、現在残つてゐるタキシラ郊外の無数のストウーバやその側面に彫られた仏像、然もまだいくつ砂漠の中に眠つてゐるか分らぬ。耕作の百姓が出土したストウーバの仏像を、上手に缺いて沢山売りに来るこ

とからしても、当時の造像の隆盛が伺われる。

これを反映して造像に功德ありとする思想が出て、又その仏像を観することによって三昧に入る思想が出るのは当然である。

即ち、後漢靈帝光和二年（即一七九年）月支三藏支婁迦讖によって訳された般舟三昧経に、

復有_二四事_一、疾得_二是三昧_一、一者作_二仏形像_一用成_二是三昧_一、常造_二立仏形像_一、常教_二人学_三是三法_一、

と、これはカニシカ王を去ること遠くない時期にこの傾向から、新興の大乗仏教徒によって創始されたということを示している。

又このような社会情勢を反映して当時成立した法華経に、

「若人為_レ仏故 建_二立諸形像_一……

或以_二七宝_一成 鑿石赤白銅……

彩画作_二仏像_一 乃至童子戯

或以_二指爪_一 而画_二作仏像_一

皆已成仏道

と百福莊嚴の相を以て供養することによって仏道を成ずるといっている。この傾向は、このガンダラの仏像造立の時機と無関係ではあり得ない事件であると私は考える。

◇

このように私は、パールフットからガンダラへの移行は、芸術的にも又社会的にもいろいろ興味深い問題を含む

興味ある問題として考えて来た。特にこれが又、仏教の大乗化への移行であるからである。

然もこの、無仏から有仏へ、ジャータカが燃灯仏への転換期の社会的政治的基盤を示すものとして、私はカニシカ舍利器をおしたい。今度の旅行中、特にヘシヤワル博物館長の特別の好意で、仏教徒という意味で秘宝の舍利器をこの手に抱かせて貰った。私はこの舍利器こそ、この問題の鍵を握るものであると確信する、私はこの論文の結論を暗示するものとしてこの舍利器(写真E)の解説をしたい。



(写真E)

カニシカ舍利器は、蓋の中央に釈尊、その両側に、インドラとブラーマンが釈尊を拝して配されている、これ等はヒンズー教の神々である。私は、印度は閉された閉鎖的農村社会の集合であるといった。そこには依然としてカーストを根本とする、バラモン・ヒンズー教が依然存在していた。アソカ王や、カニシカ王の仏教信仰の厚い王ですら如何とも出来ぬ二元性があった。アソカ王の強権を以てしても、この印度の閉鎖的社會を打破するには余りにも時間が短かすぎたのだ。

我々は、バラモン教↓仏教↓ヒンズー教の図式を以てインドの宗教史を考えている。然し事實はこのような複雑な二元性を示しているのである。仏教が、その全盛の

華を咲かせている農村の部落の細胞は依然このバラモンであつた。故に仏教は、その下部構造たる商人、長者の崩壊によつて容易に衰滅するのである。

更に蓋の下方には水鳥が一行に横に並んでいる。これは明らかにローマのものである。又蓋の本体には、ベルシヤの衣装を着たカニシカ王が合掌している。然もそのまわりには花の繩なはがはりめぐらされ、キュービット、エンジェルと覚しき像が彫られている。然も題銘は蓋の側面と器の下部の空所に分かれて「カニシカ毗訶羅に於て技監臣 *agisala* とある。これはギリシヤ語の *agesilaos* であるからしてその作者は、ギリシヤ系の外国人とされている。

このように印度とギリシヤ・ローマ或はベルシヤ等が、即ちこれに印度と西方文化との綜合が単的に示されている。然も印度人でないこのクシヤン朝のカニシカ王によつて、そこには印度もなければギリシヤもない民族種族を越えた普遍的世界があるのである。又然もこれを側面から示すものとして、マトーラ附近のジャムナ河左岸のマートという所で出土したカニシカ大王の立像が、マトーラ博物館にあるが、その正面の法衣の裾に書かれた文字が「マハラ一ジャ（大王）ラジャテイラー一ジャ（王の王）デーイーヴァプトロ（天子）クシヤナの子カニシカ」と書かれている。これは又同じ文がカニシカ王の貨幣にも書かれている。これこそ、印度の王、ベルシヤの王、ギリシヤの王、支那の王等の意味を持ち、あらゆる文化を超えた普遍的な社会状態をこゝに示すものである。

要するに普遍の理念を求めて成立した仏教が、より広い普遍的なこの西北印度で、種々の異質の文化を包容して大乗仏教を形造つた。

そこにはパールフット・サンチーの立場からガンダーラへと、その立場の飛躍が行われてゆく。この基盤こそ、このカニシカ舍利器的社会であり、その飛躍台こそ、このカニシカ王の時代であつたといえよう。